The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	あのころの懐徳堂
Author(s)	外山, 軍治
Citation	懐徳. 1966, 37, p. 103-105
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90429
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

人であった。しかし先生には高師出の色彩は全く見られなかった。當時の高校生の嗅覺は、この點に關しては敏感であったはずである。先生は重厚で、ゆったりとした大人の風格を感じさせる人物であった。

先生が大阪高等學校から懷德堂に轉ぜられたことに關しては、當時の校長であった某が、その腹心の部下を迎え入れるための工作だという噂があり、同僚や學生の有志が先生の自宅を訪れて眞相をただしたことがある。しかし、先生は不滿らしいことは全くもらされなかったので、事なく終った。ただ後になり、ごく近い人に向って、あれは詰め腹だったと告げられたそうである。傳統のない新設高校では、校長の御都合主義による人事は珍しくなかった。

間もなく、なお少からぬ春秋を殘しながら、先生は急逝された。書物の購入に急であったために、御家族も苦勞されたように聞いている。いわば、先生の生涯は不遇の一語につきる。だが、大人であられた先生は、悠然として白玉樓中に向われたことであろう。

あのころの懷德堂

外山軍治

あのころというのは昭和三年から四年にかけてのことである。わが師財津愛象先生が大阪高等學校教授の職を辭して懷德堂教授になられたのが昭和四年三月、天皇陛下が大阪市へ行幸になり、勅使を懷德堂へ遣わされたのが同年七月であったから、懷德堂にとっても歴史的な時期であったはずである。私は舊制大阪高等學校の二年から三年にかけてのことで、大學は京大をえらび、東洋史を專攻しようという志望がかたまりかけていた時期にあたる。

私が懷德堂の聽講生になったのは昭和三年九月のことであるが、もちろんそれには財津先生の紹介を煩わした。先生は懷德堂講師として、毎週月曜日の夜に定日講義ということで左傳を講じておられた。そのとき學校でも二時間のうち一時間は左傳の講讀になっていたので、そのつづきをもっと聽かせていただきたいと思ったのと、懷德堂に來講していられたいろいろな先生の謦咳に接した

いという氣持からであった。それで、毎週土曜日に開かれる定期講演や記念祭典當日の講演にもできるだけ出席した。中でもとくに感銘をうけたのは、三年十月六日の記念講演で「章學誠の史學」と題する講演をされた湖南内藤虎次郎先生である。

講演の内容は少々専門すぎてよく理解できなかったが、そのとき先生は壇上から聽衆をみまわされて「ここには軍人のかたも見えておるようですが、武田家の兵學は武田家がほろんでからおこりましたもので……」というようなことを話された。

軍人は二三人最前列にならんで聽講していたが、そのうちの一人はたしか第四師團長林彌三吉中將であった。私は碩學の貫祿というのはこんなものかと妙に感心してしまったのである。かんじんの講演の内容はよくわからないで、ムードに感心してしまったことは少々てれくさい。記念祭典には在大阪の官衙の代表者や名士たちが多數出席して、堂外には自家用車がズラリとならんで、時ならぬ盛況を呈したものであった。

懐徳堂での財津先生の講義は、學校のそれよりは、何だかサラサラした感じで、少々よそゆきになってられるように思った。學校ではよく脱線して、その博識ぶりで私たちをよろこばせたのであったが、懐徳堂ではそんなことはなかった。何か疲れていられるようにさえみえたが、あるいはそのころから、時間外の講義が少しづつ先生の負擔になりかけていたのかも知れない。

聽講生の中にはいろいろ變った人がいた。今西さんという老人が、いつも腰掛にマントをしいてその上に端座し、ほとんど眼を閉じて聽いていた。何か共鳴することがあると、「フム、フム」と聲を出した。また「ときに先生！」ときり出して、風變りな質問をもちかけて先生をなやました。

その後、やはり私たちの先生で日本史の佐々木恒清先生が講師として『神皇正統記』を講ぜられることになったが、今西老はさっそく奈良市に住む佐々木先生を訪問し、いくつかの質問をしたらしい。先生の答えが氣に入ったのか、あとで私に、「あの先生はなかなかやり手や！」といった。この老人は、何でも南でやとな組合の書記長をしている人で、齋藤拙堂の楠氏研究の研究家であると聞かされて、懐徳堂はよいところだなぁとつくづく思ったことである。私はこの老人から「お若いのに感心でんなぁ」といわれたことがある。むこうでは私のほうが變っていると思っていたのであろう。

あのころの懐徳堂のあった東横堀かいわいの風物もなつかしいものである。本町橋にはかき舟が浮んでいて、

あかりを川面にうつしていた。暖い大阪でも冬はさすがに川風がつめたかったが、懐德堂の教室には、小さいながらガストーブが入っていた。あのころとしては、ぜいたくなものであった。

せっかくいってみて休講の掲示が出ていることもあった。學校では先生の休講はたのしいものだが、懐德堂での休講には少々がっかりした。三年十月八日（月）、まんわるく財津先生が休講であった。しかたがない。足をのばして道頓堀へ出た。辨天座で文樂の人形淨瑠璃が引越興行をやっていた。ぶらり立見席に入った。まんのよいことに、先代の竹本津太夫の日向島をはじめからきくことができた。左傳の休講もたのしいかなである。

今となっては何から何までなつかしい。諸先生のご冥福をいのりつつ。

四一、九、二記

吉田鋭雄先生を憶う

高木正一

私が先生に始めてお目にかかったのは、たしか、終戰後間もない昭和二十一、二年の頃であったと記憶する。ある日のこと、池田の古本屋の前を通りかかった私は、幾帙かの漢籍が店先に積みかさねられているのを見つけて、飛びつくようにこれを手にとって眺めていた。店の主人も今時珍らしい客と思ったのであろう。あれやこれやと親しげに話しかけてきた。歸りがけに、漢籍の出物があったら是非知らしてほしいと賴んでおいたところ、早速數日後に連絡があった。少々なら手ばなしてもよいと言われる方があるから紹介しましようとのこと。すぐその足で案内されたのが先生のお宅である。書物がとりもってくれた不思議な縁とでも言おうか。書齋に通された私は、問われるままに、京都大學で中國文學を專攻しているむねお答えすると、この節、奇特な心がけだと、いろいろおほめや激勵の言葉をいただいた上、若輩で一面識の私を、あたかも舊知のごとく、溫くもてなして下さった。謹嚴な中にも慈しみのこもった、見るからに篤實な儒者らしい先生のあの時のお顏が、今もなお目なかいに髣髴する。

以來私は、招かれたり、おしかけたりして、しばしば